

# 日本語の「ウナギ文」を中国語に訳す時※ ——中国語の「鰻魚句（ウナギ文）」について考える——

袁 暁 今

## 1. はじめに（日本語の「ウナギ文」）

たいていの日本語教育の本は「AはBだ」から始まる。この構文に対応する中国語は「A是B」である。そこで多くの初級中国語の教科書においても、最初に教える文法項目は、この「A是B」構文である。いずれも両言語における基本構文であり、簡単に習得でき、誤用が生じる余地はほとんどないものと考えられている。

- 1 私は日本人です。
- 1' 我是日本人。
- 2 我輩は猫である。
- 2' 我是猫。

おそらく、例1を1'のように訳せない日本人学習者は一人もいないであろう。例2は周知の通り、夏目漱石の小説のタイトルであり、擬人化され、主語が「我輩」となっている。中国語訳<sup>2(1)</sup>に関しては、原文が「擬人」である限り、訳文の「我」も、この場面では猫の擬人である。しかし下記の例文は、これと同様に見えて、突然、大きな問題を惹起する。

- 3 僕は鰻だ。
- 3' 我是鰻魚。

単文においては、例3のデフォルト解釈<sup>2)</sup>は例2と同じ、「擬人」の用法であり、例3を中国語に直訳すると、3'となる。これはこれで「正しい」訳であると言える。しかし、これをある文脈の中に置くと、まったく意味が異なってくる場合がある。例えば、食堂に入って注文する際に、

4 Q (店の従業員が) 何にしますか。

A (メニューを見ながら) じゃあ、僕は鰻だ。(Qは疑問、Aは回答)

例4の回答文の「僕は鰻だ」は文脈支持のない例3と異なり、ここで、客が言おうとしているのは、「僕は鰻を注文する」、あるいは、「僕の注文は鰻だ」、あるいは「僕が注文したいのは鰻だ」、ということが明らかである。

例4のようなケースを、日本語学においては「ウナギ文」と呼ぶ。

通常、「A是B」と「AはBだ」においては、「A=B」或いは「 $A \in B$ 」を意味する。つまり、AとBは「同一関係 (identifying)」または、「包摂関係 (subsumption)」<sup>3)</sup>と規定され、AとBとの個別的で文脈依存的な関係は問題にされない。一方、「ウナギ文」の面白い所は、上述した構文の形をとりながら、そこで表わされる意味は「同一関係」でもなければ、「包摂関係」でもない。

## 2. 問題提起

### 2.1 機械による日本語「ウナギ文」の翻訳

2年前、機械によるニュースの字幕翻訳評価の研究をした。その時点では、自由文の日本語から中国語への機械翻訳の精度は極めて低かったと断言できる。袁 (2017) では、ニュースの字幕、キャスターやリポーターの発言を機械翻訳で検証したところ、「正解率はわずか一割だった」。

この誤訳の原因を究明していくと、その要因の一つとして、日本語の「名詞述語文」に機械がうまく対応できなかった、ということが分かってきた。

王燕 (2015) では、「中国語に比べ、日本語では、『名詞述語文 (A<sup>4)</sup>はBだ』のバリエーションが豊富で、多用されている」と指摘している。このため日本語の「名詞述語文」に対応するために、中国語は「A是B構文」「名詞述語構文」「動詞述語構文」「形容詞述語構文」の四つの構文を総動員して訳さなければならない。しかし機械の翻訳機は、ほとんど「A是B構文」のみで反応している。

そして「名詞述語文」の一種である「ウナギ文」の直訳に起因する誤訳も少なくなかったことが分かっている。例えば、2016年10月8日のNHKのニュース7の放送中、「天気予報」への導入部分でメインキャスターは

以下のように語った。

5 気象情報は菊池さんです。

この一文を四つの翻訳エンジンを用いて、翻訳を行った。

5' \*天气预报[是]菊池先生。 (Google)

5" \*天气预报[是]菊池。 (Microsoft / Weblio / Baidu)

いずれも例5の直訳となっている。「気象情報は○○です」という文は日本のニュース番組においては、誰もが使い、また視聴者にとっても聞き慣れた定型文である。そうであるのに、中国語に直訳された5'や5"は、何故かたいへん奇妙な感じがする。これを許容する中国語母語話者はいないであろう。

中国においては、一般的に、天気予報の担当者の名前を口頭で紹介する習慣はなく、例え情報として伝える場合でも、字幕でその担当者名前を表示する程度に留まる。このような場面を考察するに、文化背景の違いも一種の「文脈情報」として「ウナギ文」の生成に影響していると考えざるを得ない。

この経験が日本語の「ウナギ文」の翻訳について考えるきっかけとなった。そこで、機械による「ウナギ文」の翻訳結果をさらに詳しく観察することにした。例5はニュースキャスターだけの表現の特殊性という観点からして、難度の高い例かもしれない。そこで、文脈を有し、日常会話でも想定しやすい例6を用いて、同じ翻訳エンジンで中国語に訳してみた。

6 Q 何をお飲みになりますか。

A 私は赤ワインで、彼は白ワインです。

**Google**

Q 你喝什么? A \*我[是]红酒, 他[是]白葡萄酒。

**Microsoft**

Q 你想喝点什么? A \*我[是]红酒, 他[是]白葡萄酒。

**Weblio**

Q 喝什么? A \*我[是]红葡萄酒, 并且他[是]白葡萄酒。

## Baidu

Q 您喝点儿什么? A 我喝红葡萄酒, 他喝白葡萄酒。

訳文の「A」部分に注目すると、中国の翻訳サイト Baidu のみが「喝」とし、ほかの三種の翻訳エンジンによるアウトプットは足並みを揃えて「是」とした。やはり、中国語母語話者にとっては、この「是」はやや受け入れにくい訳文である。この場面では、文化背景の差異を考慮する必要はないはずである。

日本語の「ウナギ文」を直訳した結果としての中国語「ウナギ文」に違和感が大きいのはなぜなのか。

## 2.2 中国語学習者による「ウナギ文」の翻訳

機械翻訳は文章そのものの難易度と関係なく、「ウナギ文」の翻訳に関しては満足できない状況であることが、前記の例を見ても明らかである。これは今後コンピューター言語学にとっては大きな課題となるだろう。それでは、人による翻訳はどうであろうか。中国語教育の観点からも、日本人学習者が「ウナギ文」をどのように翻訳するのか、その結果を観察することは意味があると考えた。

まず、比較的難しい例5を中国語の学習歴が3年以上の中国語専攻の大学生(四年生)8名に翻訳させた。案の定、被験者全員が「天气预报是菊池」と訳しながらも、腑に落ちない表情を見せた。それが的を射ていないことを直感しているのである。後で話を聞くと、「日本語に変な構文があることに初めて気付いた。中国語への訳し方に困った」というのである。

一方、例6を中国語の学習歴が半年の中国語専攻の大学生(一年生)28名に翻訳させた結果、細かい点では多少間違いもあったが、重要な部分は「Baidu」と同様に翻訳し、全員が正解を出した。つまり、「是」ではなく、「喝」を使用しているのである。被験者はおそらく「ウナギ文」という名称さえ知らずに、疑問文で得た文脈情報を用いて、正確に認知処理(述語の類推解釈)をした上で、そこから中国語を出力(翻訳)したと考えられる。この実験結果の差は何を物語っているのだろうか。

## 2.3 中国語研究者による「ウナギ文」翻訳の内省

学習者へのテストと平行して、自ら「ウナギ文」を収集し、様々なケー

スにおいて、「ウナギ文」の成立について、どのような条件が必要なのかを考えた。例えば、判断が難しい例として挙げた例6と全く同じ場面であっても、例7のように質問の仕方を少し変えることによって、中国語訳はすんなりと受け入れられるものになるのである。

- 7 Q ご確認致します。こちらのお客様の注文は赤ワインで、奥様のご注文は白ワインですね。
- A そうです。私は赤ワインです。彼女は白ワインです。
- 7' Q 确认一下，这位先生点的是红葡萄酒，您妻子点的是白葡萄酒，对吧？
- A 对，我是红葡萄酒，她是白葡萄酒。

内省の結果、中国語にも「ウナギ文」が存在しているということに関して異論はない。しかし、直観では、日本語ほど多種多様ではなく、また、語用上の制約が日本語より厳しいのではないかと考えている。それを明らかにするためには、まず、中国語の「ウナギ文」の全体像を的確に把握する必要があると痛感した。

### 3. 先行研究と本稿の目的

#### 3.1 日本語の「ウナギ文」に関する先行研究

日本語の「ウナギ文」に関する先行研究は数えきれないほどある。日本語研究の第一人者である金田一（1955）から始まり、最も権威のある専門書は奥津（1978）の『「ボクハウナギダ」構文—ダとノー—』である。「ウナギ文」の文法機能については、いずれも「述語代用」であると述べている。

島田（1983）はそれまでに提案されていた「述語代用説」「ノダ説」「コピュラ説」「分裂文説」の四種の学説に対して異議を唱え、「ウナギ文」は質問に対する「呼応文」として存在している、との見解を示した。

坂原（1990）はメンタルスペース理論で提唱された「役割」の概念を用いて、「ウナギ文」を「本来なら有るべき役割が省略され、変域の要素と値が直接結びれた同定文である」と分析している。例えば、「僕は鰻だ」では、「僕＝変域」「注文した＝役割」「値＝鰻」となっている。

高本（1995）（1996）では、金田一（1955）、三上（1960）、奥津（1978）、

久野(1978)、仁田(1980)、北原(1980)、堀川(1983)、山梨(1988)などの数十もの先行研究を4つのタイプに分類整理した。その上で、従来の研究(変形説)には「過剰な文法化(over-grammaticalization)」が見られると指摘している。「ウナギ文」発話の解釈のポイントは、デフォルト解釈がキャンセルされることによって引き起こされる推論にあると主張している。つまり、語用論的な視点を取り入れ、従来の統語構造分析を補完している。

この2篇の論文、つまり高本(1995)(1996)には、執筆された時点までの先行研究が網羅されているため、本稿では、それらの論文そのものを引用しない場合には、参考文献の中で再録しないものとする。

金谷(2002)では、「AはBだ」の「Aは」と「Bだ」との文法的な関係を切り離し、主題としての「Aは」で文はいったん切れていて、聞き手の注目を集めておき、基本文である名詞文「Bだ」を添えたものに過ぎないと述べている。

また、奥津(2007)では、「ウナギ文」の文法については、「談話文法(discourse grammar)」であるとし、前提、あるいは文脈があれば、省略・代用があるという。ただし、それぞれの言語にそれぞれの談話があるため、どんな場合に省略・代用するのか、各言語によって違うと述べている。

### 3.2 中国語の「ウナギ文」に関する先行研究

前述したように、中国語の中に「ウナギ文」があるのか、という問いに対する答えは「イエス」である。しかし、日本語の「ウナギ文」を直訳すると、中国語の「ウナギ文」になるかという点、それはそうではない。前出の奥津(2007)も述べているように、中国語の「ウナギ文」は日本語の「ウナギ文」と異なる様相を見せていると推測している。

まず、中国語の「ウナギ文」の名称について紹介する。中国語の「A是B」構文の研究それ自体は中国語文法体系においては、たいへん重要なテーマであり、その先行研究も数え切れないほどある。一方、それらの中で「ウナギ文」に関する論述は決して多くはないが、王力(1943)では、既に「A是B」構文の中で、ロジックに反するものが存在し、これは言語の経済原則によるものだと指摘している。Chao(1968)、沈(2008)なども「ウナギ文」について論じていたが、その時点ではまだ定着した名称が無く、沈(2008)では、「他是协和医院(彼は協和病院だ)のような構文」と表現し

て、Chao などの「移位派生説（変形説）」を否定し、「移情説（感情移入説 empathy）」を打ち出している。

近年、「鰻魚句」の名称がやっと導入されたが、中国語の「鰻魚句（ウナギ文）」に関しては、その研究は緒に就いたばかりである。中国の学術文の検索サイト CNKI で「汉语的鰻魚句」を検索しても、参考文献にリストアップした三篇（内一篇は新聞記事）しか紹介されていない。

中国語でも、「鰻魚句」は日常会話でしばしば使われているはずだが、それと意識されないままに使用されていることも多い。一方、言語学、特に文法の研究者と教育者の観点からは、規範文法的なバイアスがかかっているために、「鰻魚句」を言語学上の大きな研究テーマとすることについては、どこかで躊躇する意識があり、これが「鰻魚句」の研究を敬遠する原因となっているのではないか。

王宇新（2012）では、中国語の「A 是 B」の先行研究を踏まえた上で、特殊な文脈解釈に依存しない「鰻魚句」を「非典型鰻魚句」と定義し、B は A<sup>5)</sup> の「恒常特徴」「材料」「量」「存在場所」「存在時間」の 5 種類に分けた。これにより、いずれも「A は B だ」に翻訳できるという<sup>6)</sup>。

陈、黄（2015）では、「ウナギ文」と「鰻魚句」を「言語の経済原則 (Economy Principle)、特に聞き手側の Q 原則 (Quantity Principle) と話し手側の R 原則 (Relation Principle)」<sup>7)</sup>の角度から考察し、その異同について、「中心語省略型<sup>8)</sup>」に関しては、日中は酷似しているが、動詞省略型<sup>9)</sup>に関しては、中国語は中心語省略型ほど自然ではない」と指摘している。

霍（2019）では、中国語の「鰻魚句」の生成のメカニズムは「換喩 (Metonym)」によるものであると主張している。

以後、本稿では、日本語の「ウナギ文」は「ウナギ文」と記述し、中国語の「ウナギ文」については「鰻魚句」と記す。

### 3.3 本稿の目的

3.1 で述べたように、「ウナギ文」については研究者の関心も高く、既に多くの先行研究が蓄積されている。しかし、これらの研究をさらに発展させようとするのが本稿の趣旨ではない。ここでは、これらの「ウナギ文」に関する先行研究を踏まえ、「鰻魚句」研究を深化させ、その上で「ウナギ文」の中国語への翻訳法を考案し、改善することをその目的とする。

## 4. 「鰻魚句」について考える

### 4.1 仮説

2.2で触れたように、学生が平叙文単体と疑問文の回答文としての平叙文を翻訳する際に、異なる反応を示した。これが本稿に重要な示唆を与えてくれた。そこでまず、「平叙文単体」と「疑問文・回答文セット」においては、「鰻魚句」の生成条件が異なる、との仮説を立てた。

ア 平叙文単文単体の場合、つまり、文脈不要のケースでは、AとBは「部分と全体」の関係でなければならない。平叙文複文単体の場合、つまり、文脈情報有りのケースでは、対比の文脈に置かなければならない。結果的に、「 $A = B$ 」或いは「 $A \in B$ 」と見なすことができる。

イ 疑問文・回答文セットの場合、「対比の文脈である」、「回答文は疑問文と同じ述語動詞で反復する」、「言語の経済原則」の3つの条件が同時に満たされなければならない。

### 4.2 考察

#### 4.2.1 「平叙文単体」の場合

まず、平叙文単体の場合、「単文」と「複文」に分ける必要がある。

##### 4.2.1.1 「平叙文単文単体」の場合

8 我 $\overline{\text{是}}$ 308(房)。 8' 私は308(号室)だ。 奥津(2007)

9 我 $\overline{\text{是}}$ A班。 9' 私はAクラスだ。

例8、9のような「鰻魚句」は文脈の助けが無くても理解可能である。その意味では「ウナギ度(ウナギ文らしさ)」の低い文であると考えられることもできる。その理由は「A」と「B」は「一体」の関係、あるいは「部分と全体」の関係が明瞭であることにある。例文8では、「私」が「308号室」に泊まっている間は、私とその部屋とは「一体」(=)の関係で結ばれている。例文9では、「私」は「Aクラス」の「一員」( $\in$ )である。「一体」の関係と「部分と全体」の関係は「A是B」の「同一関係」や「包摂関係」に極めて近似していると考えられる。

日本語も中国語もこの場合、「文脈不要」という点においては共通して



いるため、「ウナギ文」と「鰻魚句」の間では、ほかの操作を施す必要が無く、そのまま対訳することが可能となる。

#### 4.2.1.2 「平叙文複文単体」の場合

次に、平叙文単体でかつ複文の場合をさらに2つのケースに分けて考察してみる。

##### 4.2.1.2.1 「平叙文複文単体対比文脈有」の場合

- 10 天气预报[是]王丽，体育新闻[是]李明。  
10' 天気予報は王麗で、スポーツニュースは李明です。
- 11 我们都嫁到了国外，我[是]日本丈夫，她[是]美国丈夫。Chao (1968)<sup>10)</sup>  
11' 私達は二人とも外国に嫁ぎました。私は日本人の夫です。彼女はアメリカ人の夫です。
- 12 两个人都有孩子了。我哥[是]女孩儿，我姐[是]男孩儿。  
12' 二人ともに子供が出来ました。兄は女の子です。姉は男の子です。
- 13 我[是]奔驰，他[是]宝马。  
13' 私はベンツです。彼はBMWです。
- 14 选手们入场了，中国[是]孙杨。  
14' 選手の入場です。中国は孫楊です。
- 15 喝茶要分季节，夏天[是]绿茶。  
15' 季節によって、飲むお茶が違います。夏は緑茶です。

上記の例文10～15は、対比構文<sup>11)</sup>によって、「A」と「B」の結びつきが明確になる例である。「Aは他でもない、正しくBである」というのが対比によってもたらされる効果である。その強い断定の効果を利用して、「A」と「B」の排他的な一体感が醸成される。「A是B」の「同一関係」や「包摂関係」が顕在化して、無理なく「鰻魚句」として成立するのである。

例えば、例文10では、単文では分かりにくい「A」と「B」の関係が、対比によって（あたかもクロスワードパズルの縦と横のヒントのように）あぶり出されるのである。「A＝天気予報を担当するのは、ほかでもないB＝王麗その人だ」との推論が可能になる。勿論、この背景には「ニュース番組内には天気予報やスポーツのコーナーがあり、それぞれ担当アナウンサーが決まっている」という「世界知識」があつてのことである。

例文11以降も対比の例であるが、例文11と例文12は対比の文脈だけで

はなく、前提となる別の文脈（「外国に嫁いだ」、「子供ができた」などの事前状況説明）が設けられている。対比と一緒に「鰻魚句」の成立に力を貸していることは言うまでもない。しかし、中国語の場合、この事前の状況説明が決め手ではなく、あくまでも、後ろの対比の文脈が「鰻魚句」を促成する要であることを強調しておきたい。対比の文脈の重要性についてはすでに述べたが、一方、事前の状況説明の役割については後述の4.2.1.2.2を参照されたい。

対比については、さらに次のことを特筆しておきたい。例文13のドイツ製の高級車「ベンツ」と「BMW」のように「明比」すること（極めて明示的な形で対比すること）が可能なケースもあれば、例文14のように、文脈情報が隠れている「暗比」（対比の文脈が表には出ず、暗黙のうちに構成している）のようなケースもある。勿論「暗比」でも「A」と「B」の結びつきを強調する効果は発揮される。ここでは「世界知識」もひと役買うことになる。例文14では、「水泳競技は通常8レーンで競うことになるが、中国代表はほかでもない、まさしく孫楊である」との推測が可能になる。例文15も同様で、季節と言えば、「夏」の対比項は「春・秋・冬」の3つがあって、これも対比（暗比）の文脈と言える。「夏と言えば、ほかでもないまさしく緑茶である」。

このタイプの「ウナギ文」の翻訳法に関しては、直訳でもそのまま「鰻魚句」として認められる。

#### 4.2.1.2.2 「平叙文複文単体非対比文脈有」の場合

例文5のケースで、ニュースキャスターが「気象情報は菊池さんです」と発言する前に、「週末の天気は気になりますね、続いては、お天気を見てもみましょう」等の短い「事前状況説明」を加える場合がある。それがない場合では、「気象情報」の字幕が出ると同時に、菊池さんが気象図の前に立っている映像がテレビの画面に映し出されている。この映像情報は「場面情報」と呼ばれる。画像を見れば、「世界知識」によって、「この人は気象予報士で、これから天気予報が始まる」と認知することができる。

また、日本語の「ウナギ文」の使途を観察していると、テレビコマーシャルの中でかなり頻繁に使われているケースに出会う。15秒、30秒というごく短い時間内に多くの情報を詰め込むために、言葉の省略が多用されるのは当然と言え当然である。そして、ここでは「場面情報」がふんだんに盛り込まれている。但し、これらの「事前状況説明」や「場面情報」が

日本語の「ウナギ文」の成立には十分働いているのに、中国語には機能せず、したがって「鰻魚句」として成立しないケースが多い。

例文16は著名人が自動車のコマーシャルに出て、「私はベンツです」というセリフを言うのである。その著名人の名が「ベンツ」なのではなく、映像の中で彼の後ろに映っている車が「ベンツ」で、それを推薦しているのだと理解できる。これも「場面」が情報になっている。

### 【自動車のCM】

16 私はベンツです。

16' \*我是奔驰。

16" 我买/选择/推荐奔驰。 (私はベンツを買う/選ぶ/薦める)

しかし、中国語では、これは「鰻魚句」としては通用しない。なぜか。4.2.1.2.1の例文13、「我是奔驰」という全く同じ文が成立するにも拘らず、ここでの例文16'が「鰻魚句」として成立しないのはなぜかと言い換えてみよう。例文13はそのあとに「他是宝马」と続く対比構文である。対比による強調の効果が消えたために、例文16'のAとBの意味関係が緩くなった結果、「鰻魚句」として成立しなくなったと考えることができる。

「A是B」の「鰻魚句」を成立させるためには、「説明性言語」である中国語はAとBの明確な関係説明を文脈に要求する。しかし、主題の導入に過ぎない「事前状況説明」や「場面情報」などの文脈はAとBの必然的な意味関係を推論させるには、対比に比べて、力量不足なのである。従って「ウナギ文」としては成立しても、「A是B」の本来の「同一関係」や「包摂関係」を表す意味機能から乖離しているために、「A是B」の形をとる「鰻魚句」としては許容されないということになる。

この結果、16"のように、このタイプの「ウナギ文」を翻訳する時には、その場面に相応しい動詞を補填しなければならない。

次に、日本語では、質問が文脈を作っている場合に「ウナギ文」の発話が使用されやすいという、金田一(1955)、島田(1983)などの先行研究がある。果たして中国語はどうであろうか。

疑問文に対応する回答文の中の「鰻魚句」を観察してみよう。

#### 4.2.2 「疑問文と回答文セット」の場合

さらに、回答文の「単数回答」と「複数回答」に分けてみる。

#### 4.2.2.1 「疑問文と回答文セットの単数回答」の場合

その上、疑問文を「疑問代名詞」型と「疑問助詞」型に分けてみる。

##### 4.2.2.1.1 「疑問代名詞疑問文と回答文セットの単数回答」の場合

中国人はレストランで注文する際に、店員に「何にしますか」と聞かれた時の答えとして、簡潔に食べ物の名前のみを伝えるか(17A1)、または注文の際によく使われる四つの動詞(例文下線部)のどれかを使って、「我 + (点/要/吃/来) + 料理名」と言うか(17A2)、いずれかである。17A3のような「鰻魚句」の形式は取らない。

- |                             |                   |
|-----------------------------|-------------------|
| 17 Q 您 <u>点/要/吃/来</u> 点儿什么? | Q' 何を注文しますか。      |
| A1 拉面。                      | A1' ラーメンです。       |
| A2 我拉面。                     | A2' 私はラーメンを注文します。 |
| A3 *我 <u>是</u> 拉面。          | A3' 私はラーメンです。     |

中国語の「疑問代名詞疑問文」の本質は「穴埋め問題」である。つまり、疑問代名詞の「穴」を埋めれば、答えになる。また、フルセンテンスで回答することもできるが、主語、述語をそのまま継承する反復(echo)の形にすることが多い。

例17においては、言語の経済原則を重視するなら、17A1のように、「什么(何)」という穴に「拉面(ラーメン)」を埋めるだけで、答えとしては十分である。ポライトネスを重視するなら、フルセンテンス回答文17A2の言い方が丁寧である。一方、17A3のように、単音節述語動詞をわざわざ同じ単音節の「是」に替える必要性はどこにも無い。経済原則を体現していないからである。この点に関しては、陳、黄(2015)でも同じ指摘(節約がゼロ)があった。

従って17A3'のようなタイプの「ウナギ文」を中訳する際には、17A2のように動詞を補填しなければならない。

##### 4.2.2.1.2 「疑問助詞疑問文と回答文セットの単数回答」の場合

次に、レストランで飲み物を注文する場面で、聞き方の異なる例を見る。店員が注文を取った後で、18Qのように確認した。この質問に対しては、18A1のように答えるが、18A2のような「鰻魚句」の形式は取らない。

- |                          |                 |
|--------------------------|-----------------|
| 18 Q 您点的 <u>是</u> 红葡萄酒吗? | Q' ご注文は赤ワインですね。 |
|--------------------------|-----------------|

- A1 不<sub>是</sub>。是<sub>是</sub>白葡萄酒。 A1' いいえ、白ワインです。  
A2 不<sub>是</sub>。\*我<sub>是</sub>白葡萄酒。 A2' いいえ、私は白ワインです。

中国語の「疑問助詞疑問文」の本質は「選択問題」である。つまり、「はい」と「いいえ」の間で選択する。「はい」の場合、「述語」を繰り返せば答えになる。「いいえ」の場合、「否定副詞＋述語」で答え、さらに正解を補足したい場合に限って、その正解を同じ述語を使って述べる。

例18では、疑問文の述語は断定動詞「是」のため、回答文も反復して、「是」で答えなければならない。A1は模範回答で、A2の文中の「我」は模範解答よりも一文字多く、経済原則に違反しており、この「鰻魚句」は不採用となる。中国語では決してこのようには言わない。

このタイプの「ウナギ文」を訳す時には、主語を削除しなければならない。

#### 4.2.2.2 「疑問文と回答文がセットの複数回答」の場合

複数回答の場合も、疑問文を二型に分ける。また、「複数回答」というのは必然的に「対比」の文脈の下にあることを意味する。

##### 4.2.2.2.1 「疑問代名詞疑問文と回答文セットの複数回答」の場合

仮に中国語母語話者2人が「好きな音楽家は」と聞かれたとする。この場合も、それぞれ名前だけを挙げるか(19A1と19B1)、または、質問文にあった動詞を繰り返して、フルセンテンスで回答するか(19A2と19B2)、そのいずれかになる。

- |                         |                     |
|-------------------------|---------------------|
| 19 Q 你喜欢哪位音乐家?          | Q' お好きな音楽家は誰ですか。    |
| A1 贝多芬。                 | A1' ベートーヴェンです。      |
| B1 莫扎特。                 | B1' モーツァルトです。       |
| A2 我喜欢贝多芬。              | A2' 私はベートーヴェンが好きです。 |
| B2 我喜欢莫扎特。              | B2' 私はモーツァルトが好きです。  |
| A3 *我 <sub>是</sub> 贝多芬。 | A3' 私はベートーヴェンです。    |
| B3 *我 <sub>是</sub> 莫扎特。 | B3' 私はモーツァルトです。     |

同じ文脈においては、日本語では、むしろ「ウナギ文」(19A3' と19B3') が慣用される。対照的に、中国語では「鰻魚句」(19A3 と19B3) の使用は避けられる。4.2.2.1.1と同じように、「穴埋め問題」であるため、19A1

と19B1はベストの回答で、19A2と19B2は丁寧な言い方になる。しかし、19A3と19B3は不適格とされる。何故なら、「喜欢」は二音節動詞で、単音節の「是」で代替することが経済原則を遵守しているかのように見えるが、「是」で代替することによって、あたかも「私」が音楽家本人であるように聞こえ、「答非所問(答えと問いが噛み合わない)」感覚が経済原則の採用を許さないのである。

このタイプの「ウナギ文」の中訳は19A2と19B2のように、動詞を忠実に再現すべきである。

#### 4.2.2.2.2 「疑問助詞疑問文と回答文セットの複数回答」の場合

複数回答は複数各自回答(複数の人が一人一人回答する、例20)と複数一括回答(一人で全員の答えをまとめて回答する、例21)を含む。

20 Q 你们都是去北京吗?

A1 不是,我是去北京,他是去上海。

A2 不是,我是北京,他是上海。

20 Q' 二人とも北京へ行きますか。

A1' いいえ、私は北京へ行き、彼は上海へ行きます。

A2' いいえ、私は北京ですが、彼は上海です。

21 Q 你们去的都是北京吗?

A1 不是,我去的是北京。他去的是上海。

A2 不是,我是北京。他是上海。

21 Q' 二人とも行先は北京ですか。

A1' いいえ、私が行くのは北京ですが、彼が行くのは上海です。

A2' いいえ、私は北京ですが、彼は上海です。

大河内(1982)<sup>12)</sup>

例20の疑問文の述語動詞「去(行く)」前に「是」が付いていて、この「是」は「確認後の断定」という機能を持っている。前述したように、通常、回答文は疑問文と同じ述語動詞を使用するため、20A1のように「是去」で答える。そこで、「去」は既知の情報として、経済原則によって、省かれてもいいと判断され、20A2、つまり「鰻魚句」となる。

質問方法を変えて、例21Qのように「的構造場所指示(去的)」を主語として、「是」を述語にして質問した場合、返答はやはり21A1のように「去

的是」で呼応する。そこでも、「去」は既知の情報のため、経済原則に従って省略され、「鰻魚句」21A2が生成された訳である。

先ほど検討したほかの3パターンの「疑問文・回答文セット」における「鰻魚句」の使用不可という結果に対して、「疑問助詞疑問文・回答文セットの複数回答」の場合では、回答文は対比の文脈が備えられ、質問文と同じ述語動詞で反復し、経済原則にも従っていて、この結果、「鰻魚句」は認められ「成立する」ということになった。従って、このタイプの「ウナギ文」はそのまま直訳すれば、「鰻魚句」としても成り立つ。

## 5. 結語

### 5.1 まとめ

本稿は「ウナギ文」の中国語訳の際の問題点に着目し、「鰻魚句」の研究においては、「文単体」と「疑問文・回答文セット」に分けて考えるべきだと提唱し、様々のケースについて、「鰻魚句」の成り立つ条件を分析した。その結果をまとめた表1（次頁）の通り、「鰻魚句」の生成制限は「ウナギ文」より相当に厳しいことが一目瞭然となる。「以心伝心」の日本語と対照的に、中国語はしばしば「描写性言語」、「説明性言語」と言われる。本稿は「説明性言語」に相反し、その対極ともいえる範疇に属する「鰻魚句」は「ウナギ文」ほど許容されやすいものではないことを明らかにし、この表はそのことを如実に示している。

表1の中のすべての「ウナギ文」は成立しているが、そのままの直訳では「鰻魚句」として認められないものが多数ある。本稿が、中国語教育での「鰻魚句」の扱い方、及び「ウナギ文」の翻訳法に対して、少しでも参考になればと願っている。

### 5.2 今後の課題

2.1で提起した、「文化背景の違い」が「ウナギ文」と「鰻魚句」の生成に影響するのかどうか、「影響あり」とするならばどの程度の影響力を持つのか、については言及しないまま本稿を閉じた。さらには「事前状況説明」や「場面情報」が「鰻魚句」の生成に決定打にならない理由については、より深く掘り下げる必要があると考えている。この二点については、今後の課題とし、継続して取り組んで行きたい。

表1 「鰻魚句」の成り立ち及び「ウナギ文」の翻訳法

分類基準		例文・和訳		判定		日⇒中 翻訳法	
		「鰻魚句」の判定理由		中	日		
平叙文単体 (1)	単文 (1.1)	文脈不要 <sup>注1)</sup> (1.1.1)		1. 我是308(房间)。 私は308(号室)です。 2. 我是A班。 私はAクラスです。	○	○	直訳
	複文 (1.2)	文脈有 (1.2.1)	対比 <sup>注2)</sup> (1.2.1.1)	1. 天气预报是王丽, 体育新闻是李明。 天气预报是王麗です。スポーツニュースは李明です。 2. 两个人都有孩子了。 我哥是女孩儿, 我姐是男孩儿。 二人ともに子供ができました。 兄は女の子です。姉は男の子です。 3. 喝茶要分季节, 夏天是绿茶。 お茶を飲むのが季節によるのです。夏は緑茶です。	○	○	直訳
			非対比 場面情報有 <sup>注3)</sup> (1.2.1.2)	1. 下面看看天气情况。天气预报是王丽。 続いては、天気を見ましょう。天気予報は王麗です。 2. …夏天是绿茶。 夏は緑茶です。 3. …我是奔驰。 私はベンツです。 …は場面情報 ⇒ A=B、A ∈ B と見なすことができない	×	○	動詞 補填
疑問文・ 回答文セット (2)	単数 回答 (2.1)	文脈有 (2.1.1)	問答 (疑問代名詞 疑問文) (2.1.1.1)	Q 您点什么? A 我是拉面。 Q 何にされますか。 A 私はラーメンです。	×	○	動詞 補填
			問答 (疑問助詞 疑問文) (2.1.1.2)	Q 您点的是饺子吗? A 不是, 我是拉面。 Q 注文されたのは餃子ですか。 A いいえ。私はラ メンです。	×	○	主語 削除
	複数 回答 (2.2) <sup>注4)</sup>	文脈有 (2.2.1)	問答+対比 (疑問代名詞 疑問文) (2.2.1.1)	Q 您二位点什么? A1 我是拉面。 A2 我是饺子。 Q お二人は何にされますか。 A1 私はラーメンです。 A2 私は餃子です。	×	○	動詞 補填
			問答+対比 (疑問助詞 疑問文) (2.2.1.2)	述語動詞の反復× 言語の経済原則△ <sup>注5)</sup> 1Q 您二位都是点拉面吗? 1A 不是, 我是拉面, 他是饺子。 1Q お二人ともラーメンにされるのですか。 1A いいえ、私はラーメンで、彼は餃子です。 2Q 您二位点的都是拉面吗? 2A 不是, 我是拉面, 他是饺子。 2Q お二人とも注文されたのはラーメンですか。 2A いいえ、私はラーメンで、彼は餃子です。 述語動詞の反復○ 言語の経済原則○	○	○	直訳
注1)		これらの「ウナギ文」は疑問文単体でも使える。例えば、「谁是308?」、「你是哪个班?」					
注2)		「対比文脈」には「明比」(例1・2)と「暗比」(例3)の二つを含む。また、もっと大きい文脈の中に置かれる「明比」(例2)が多い。					
注3)		「場面情報」ここでは「映像やナレーションなどの情報」,特にCMの場合はほとんどこのケース。					
注4)		「複数回答」には「複数各自回答」と「複数一括回答」の二つを含む。					
注5)		疑問文の述語動詞は単音節の場合、「鰻魚句」で代替すると、節約がゼロで、経済原則を満たさないため、△とする。					



また、3.2でも触れたように、文法の研究者として、また教育者としての本稿の執筆には、規範文法的なバイアスが根底にあり、「鰻魚句」の認定に対してかなり厳しい視点で臨んだ可能性があることは否めない。本稿の未熟な見解に対して、当然ながら、多くの反論が寄せられることを希望している。

## 注

※本稿は第十一回亜太地区国際漢語教学学会年会（2019年8月・シンガポール南洋理工大学）における口頭発表の一部を基にして、修正・加筆したものである。ご意見を賜りました先生方に御礼を申し上げます。

- 1) 「我是猫」と同名の歌（作詞：台湾歌手伊能静）もある。
- 2) デフォルト解釈とは、ここでは、「AはBだ」形式の文を文脈が無い中で、コピュラ文（「A=B」か「A∈B」）として読むこと。
- 3) 他に「A是B」と「AはBだ」には「存在」、「比喻」の意味もある。例えば「医院的旁边是超市（病院の隣はスーパーだ）」「他是一个魔鬼（彼は鬼だ）」等。これらも広い意味の「同一関係」「包摂関係」と見なされる。
- 4) Aがないケースもしばしばある。例えば「雨だ」「お釣ります」
- 5) 原文では、AはN1、BはN2と表記している。
- 6) また、AとBの意味関係によって、「Aは+動詞句」「Aは+形容詞句」と訳せるケースもあると述べた。
- 7) 言語の経済原則（Zipf's Law）を踏まえ、新グライス学派を牽引した Laurence R. Horn は、Grice の挙げた4つの公理（Quality, Quantity, Relation, Manner）を2つの原理（Q[quantity]-principle と R[elation]-principle）として再編成した。Q-principle はより多くの情報を提供しようとする原理であり、R-principle はより少ない情報で済ませようとする原理である。
- 8) 「我的国籍是中国，金老师是韩国。（私の国籍は中国で、金先生は韓国です）」のような文を指す。
- 9) 「你们喝什么？\*我是红葡萄酒，他是白葡萄酒。（君達何を飲む？ 私は赤ワインで、彼は白ワインだ）」のような文を指す。
- 10) 原文をベースにアレンジした。
- 11) 単独では成り立たない事象叙述が対比の文脈に置かれると、タイプシフトして属性叙述になり、合法的な文になる例がしばしば観察される。これらの文は強い分類性を見せている（袁2014、影山・沈2012）。本稿は対比の文脈は中国語にとって非常に大きな意味をもつと考えている。「対比」の文法機能と近似する「対拳形式」、「比況性」等の先行研究についても参考されたい。

12) 原文をベースにアレンジした。

### 参考文献

- 袁晓今 (2014) 「現代中国語の三音節名詞の構造と意味」 大阪大学博士論文  
袁晓今 (2017) 「その中国語訳ちょっとへん」 2017年1月12日 朝日新聞 夕刊  
王燕 (2016) 「日中対照の立場からみた日本語の名詞述語文」 北陸大学紀要第40号 pp. 124-136  
大河内康憲 (1982) 「中国語構文の基礎」 『講座日本語学』 明治書院  
奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハウナギダ」の文法—ダとノー—』 くろしお出版  
奥津敬一郎 (2007) 「言語における普遍と特殊—うなぎ文の世界—」 第1回日本語特別講演会講演原稿 PDF 版 国立教育政策研究所  
影山太郎 沈力 (2012) 「付加詞主語文の属性叙述機能」 『日中理論言語学の新展望②意味と構文』 くろしお出版 pp. 27-66  
金谷武洋 (2002) 『日本語に主語はいらない』 講談社選書メチエ  
金田一春彦 (1955) 「日本語一文法」 『世界言語概説 (下)』 研究社  
坂原茂 (1990) 「役割, が・ハ, ウナギ文」 『認知科学の発展』 Vol. 3 特集メンタルスペース 講談社 pp. 29-66  
島田昌彦 (1983) 「『ウナギ文』論争の疑問」 金沢大学文学部論集文学科篇 Vol. 3 pp. 1-41  
高本條治 (1995) 「『ウナギ文』の語用論的分析—文脈における語彙統語構造の発展と拡張—」 (1) 上越教育大学研究紀要15-1. pp. 123-136  
高本條治 (1996) 「『ウナギ文』の語用論的分析—文脈における語彙統語構造の発展と拡張—」 (2) 上越教育大学研究紀要15-2. pp. 405-419  
陈访泽 黄怀谷 (2015) 「从语言经济性原则看汉日鰻鱼句的异同点」 汉日语言对比研究论丛 第2期 pp. 110-118  
霍四通 (2019) 「汉语中的“鰻鱼句”—也谈“你是什么垃圾”—」 语言文字周报 2019年7月17日 第002版  
沈家煊 (2008) 「“移位”还是“移情”? —析“他是去年生的孩子”—」 中国语文 第5期 pp. 387-395  
王力 (1943) 『中国现代语法』 商务印书馆  
王宇新 (2012) 「汉语鰻鱼句现象及其与日语对应关系小考—以不需要特殊语境解释的句子为中心—」 日语学习与研究 第1期 pp. 65-72  
Chao Yuenren (1968) *A grammar of spoken Chinese*, University of California Press

## When Translating the “Japanese Unagi-sentence” into Chinese —An Observation of the “Chinese Manyu-sentence”—

YUAN, Xiaojin

It is widely known that the “Unagi-sentence (‘I am the eel’ sentence)” is often used in Japanese. We can also find some similar sentences in Chinese, which are called “Manyu-sentence”, but there are not many and it seems that the restrictions on the generation of this kind of sentence is very strict in comparison with “Unagi-sentence”.

This paper tries to clarify the decisive factors in creating a “Manyu-sentence”. I suggest that we should treat “single sentence” cases and “question-answer-pair sentence” cases differently. In the former case, we should use the idea of “part-whole”, and in the latter case, the reply sentence must i) be in a contrast context, ii) be a verb echo reply, iii) satisfy the economy principle of language.

Based on these analyses and the translation problems found from machine and Chinese learners, I also put forward some proposals on how to translate “Unagi-sentence” into Chinese.

The present study on “Manyu-sentence” is not sufficient, so I hope this paper can supply a new view point.